

## 新住協総会2011

5月19日から今年度・新住協の京都での総会。  
とはいっても、まずは「前夜祭」のスケジュール。  
京都木屋町通りのお店での食事会であります。  
なつかしい、一年ぶりというみなさんも多かったのですが、  
実はきのう、初めてあった京都在住の建築家・長坂大さんといろいろお話ししていて  
鎌田紀彦先生や、いろいろなひとにご紹介していたら、  
あっという間に時間が過ぎてしまって  
失礼してしまったみなさんもいました。  
まあ、本日から2日間、本格的な総会・勉強会の日程がぎっしりです。  
ことしは、ポストQ1.0住宅の進展・模索ということで、  
かなり重要な技術的研究進展があるものと思われます。



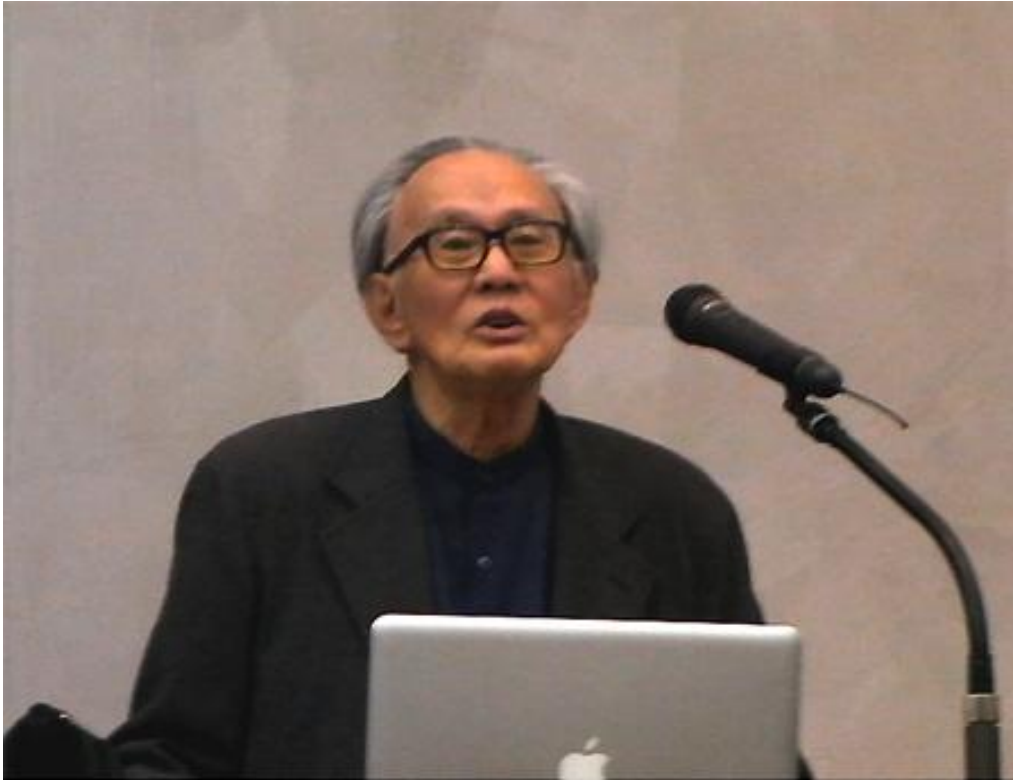
2次会では、長坂さんのご紹介で  
先斗町のお店の「納涼床」で歓談することが出来ました。  
え、こんな時期に、納涼床？というところですが、  
5月19日は京都、夏もかくやというばかりの暑さでして  
夜11時過ぎまで歓談していましたが、  
大変心地よい薫風が酒に火照った肌を冷ましてくれて  
楽しい時間を過ごさせていただきました。  
ところがせっかくの食事会だったので

カメラをホテルに忘れてくる失態。  
先斗町の紅灯の巷の美しさも、ただただ、目に焼き付けるばかりです。  
京都の人には違うように目に映っているようですが、  
わたしたち、エトランゼには、細部に至るまでのデザインが  
次々と目に飛び込んでくる街並みです。  
建築の専門家ばかりなので、また、それぞれ、着眼点も面白い。  
「あそこのあれ、いいね」  
っていう会話がひんぴんと耳に入ってきます。  
そういった交流も、年に一度の交流会ならでは。  
そういうことで、しっかりと取材していきたいと考えています。  
で、写真は、お昼に食べた松花堂弁当のような定食です。



これがけっこう、880円という値段以上の満足感。  
すこしずつ、多品種という和食の良さが味わえた食事でした。  
ほんとうは、晩ご飯が素晴らしかったのですが、  
写真は、残念ながらありません（笑）。ではでは。

## 若々しい建築家



5月20日は、新住協総会のメインイベントです。  
今回の総会では、新住協代表理事である鎌田紀彦先生の恩師である  
東京大学名誉教授・内田祥哉先生による講演も行われました。  
鎌田先生は、非常に舌鋒鋭い論客として知られていますが、  
さすがに恩師を前にしては、ややおとなしく（笑）されておりました。  
しかし、恩師が見守る中で  
自らが指導して実践的な住宅建築の技術を開発してきた  
新住協の軌跡や、多くの全国からの参加者との交流ぶりを披露されて  
少しは「恩返しが出来た」というように発言されていました。  
こうした鎌田先生の様子を、わたしたち会員は初めて目にして  
いろいろな思いを持つことが出来ました。  
内田先生はことし86才というご高齢ですが、  
お話は、颯爽とされていて若々しく、  
そして独特の語り口、平明で簡潔明快な論旨展開に  
いかにも、工学者・建築家としての真実のありようを感じさせられます。  
演題は戦後日本の木造がたどった軌跡をまとめられたものであり、  
東大工学部を導いてこられた先生の見方が直接に感受されました。  
「そうだったのか」という、腑に落ちる、  
という言葉がそのままのような、思いをしながら聞いていた次第です。



そして、Macの最新ノートパソコンを操られて  
平明に、力強く語られる姿は  
年齢をまったく超越した、若々しさを感じました。  
建築への、木造への、  
愛情のようなものが、そのお話の中にあふれかえっている。  
そういうものが  
聞くものに、若々しい情熱として伝わってくるからなのではないでしょうか？  
その後の懇親会でも、親しくお話しさせていただくことが出来て  
深く、感激いたしました。ありがとうございました。

## 新住協総会2011\_2

ことしの新住協総会は、  
鎌田紀彦先生の恩師・内田祥哉先生の講演が行われたのが特徴でしょう。  
東大工学部を卒業後、  
内田ゼミの学院性として研究してきた鎌田紀彦先生は  
いわば、日本の建築工学の本流的な立場。  
そうでありながら、当時、日本で初めて「建築システム工学」  
という専門学科を開いた室蘭工業大学にパイオニアとして  
赴いたという経緯だったそうです。  
鎌田先生は、東大での研究生時代には、

そのころ、国の建築行政の諮問委員を多数引き受けられていた内田先生の右腕的に活躍され、若いながら、多くの国の諮問委員を前によく発表されていたそうです。室蘭工大に赴任後は、北海道が抱えてきた寒冷地住宅の建築工法研究に身を捧げられ、「高断熱高気密」住宅技術を具体的、実践的に工法開発されました。こういった研究者を地域として迎え入れられたのは北海道という地域にとって、きわめて大きい出来事だったのだと思います。そして、鎌田先生は同時に日本全体の建築学会の中でも、きわめて特異に現場に精通した研究者であるとも言われています。内田先生にお話を伺っても、この点を大きく強調されておられました。これは、鎌田先生の人柄の成せるものだったのかも知れません。常にアカデミズム的な対応をよしとせず、むしろ現場大工さんに気軽に接触されてその現場工学的な部分での研究開発を最優先されてきたと思います。だから「先生の話の聞いたら、どうやって釘を打ったらいいかがわかる」というように、多くの全国の工務店さんたちが口を揃えます。これこそが、鎌田紀彦先生の工学者としての真髓なのだろうと、思われます。そしてそのことをもっとも評価される内田先生のお人柄から、この師匠にしてこの弟子が、というように感じられます。

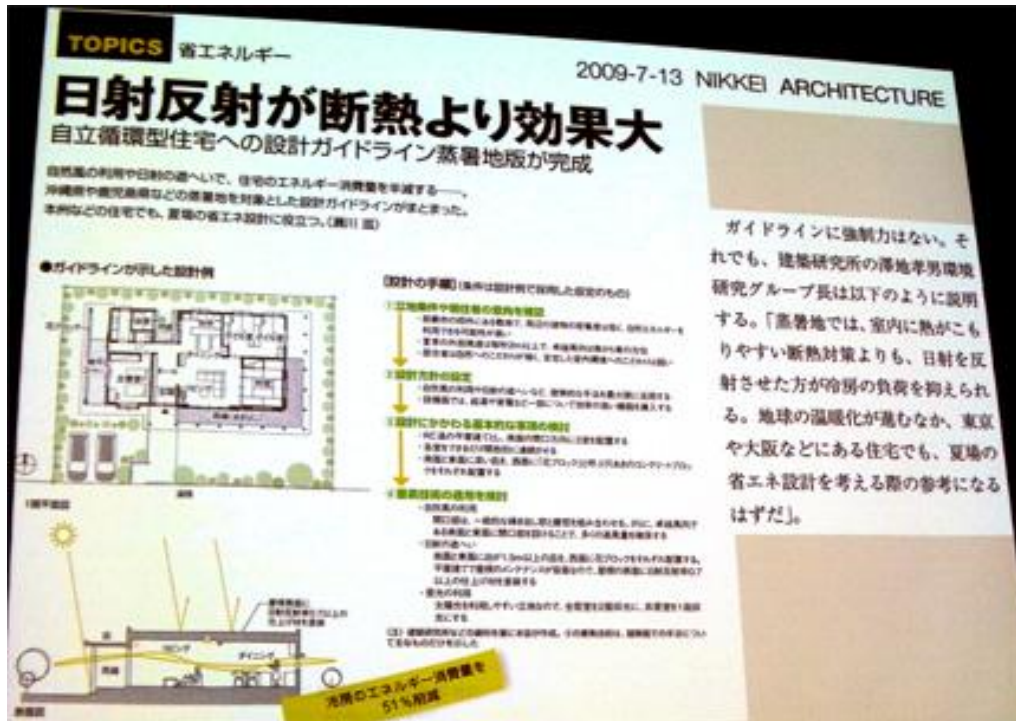
このように成立してきた北海道の「高断熱高気密」運動というものが、日本の建築工学の歴史においてもきわめて特異で意義深い1ページであると、強く感じられた今回の新住協総会でした。

## 新住協総会2011\_3

新住協の加盟工務店は、どんどん温暖地域、関西から中国四国、さらに九州へと拡大しています。なんと、来年の総会開催地は広島県に決定しました。まだ少人数とはいえ、高断熱高気密の住宅技術で、夏の蒸暑に立ち向かおうというそういったビルダーさんが確実に増えていっています。

そうなってくると、本格的に蒸暑地域・温暖地域での夏期対策が論議されていかなければならない。

断熱を基本として、日射遮蔽の技術がより大きな要素を占めることになる。



しかし、一方で、この写真の関東以南地域での住宅雑誌記事のように「断熱よりも・・・」という表現も見られる傾向には、さてどうなのでしょう、と思わざるを得ない。また、冷房付加の計算ソフトなどで、断熱を厚くしていくと、むしろ熱計算上は冷房のエネルギーが上がるようにそういう計算結果が出るようになってきているとも聞きました。詳細についてはわからないので、うかつには書けないのですが、しかし、暑い地域で屋根に断熱をしないでもいいわけではない。また、札幌などでも最近は暑い夏が来ますが、実感としては、断熱がしっかりしている住宅ほど、夏も涼しい。もちろん、いったん室内温度が上昇しすぎるとそれを温度低下させるのは、難しいとも言われるけれど、日射を遮蔽して、夜間の冷気の室内導入などを心がけると驚くほどひんやりとした室内環境が実現する。そういった生活実感を持っているので、断熱が優先しないなどありえないというように思っています。

今後、こういったことについて、正しい理解と、常識が見えるようになることを期待したいと思っています。

<以下余話・観光情報>

## 先斗町の道幅



京都といえば、先斗町ですね。  
鴨川での納涼床も、先斗町の店が一番有名なのでしょう。  
歓楽街の名称としては、代表的な名前ですが、  
行ってみれば、道幅は本当に狭くてびっくりする。  
左右に店が軒を重ねていて、この狭い小路を多くの人が肩を接しながら練り歩く。  
先斗町の本質的なものはこの小路性にあるのでしょうかね。  
京都の街が生み出した文化に  
「茶室文化」があります。



どうしてああいって「狭さ・小ささ」を強調してそのなかでデザインの工夫をやっていくのだろうか、といつも不思議な思いをする。

ああいう文化性って、外国にはあるのだろうか、と、いつも考えるけれど、モロッコのイスラム都市フェズなどを想起する程度。やはり欧米的価値観世界では、少ないように思う。

ましてや、建築空間性において目的的に追求しているというのは本当に稀有ではないかと思う。

この先斗町の小路性は、やはり茶室文化に行き着く部分なのだろうか。その昔、狭い町家の中庭の小空間に、さまざまな世界性を表現した遊びの精神がこういう茶室文化の原型なのかもしれませんが、先斗町にも、そういった感受性が生きています。どちらも、人と人との交流とか対話の文化に機縁している。そのように考えるとき、先斗町が



京都を代表する飲食店街に成長していった部分が見えるのでしょうか。狭さの中で、さまざまな空間的演出をこれでもかと思せつけられる。狭くすることで、想像力は逆に極限まで高められる。象徴性への感受力が大いに高まっていくと思います。空間を表現する要素についての、共通認識が細やかに成立していく。寸法を小さくすることで、こういう感受性を磨き上げていこうというのは、やはり、こういった京都の「都市文化」の賜物だと思います。そこで展開している、ものの「表徴性」あるいは、コミュニケーションの繊細さについて腑分けしていくと面白い文化論になるのではないかと思います。あるいは、誰か、もうやっているのかなあ。

## 緑を「縁取る」

写真は、京都での見学先、大徳寺龍源院玄関先の様子。知人から、龍安寺石庭とはまた違った禅の庭園と知らされて、ということで見学に訪れました。まあ、きっかけはそういうことですが、やはり、京都の街を歩く楽しみは積層された木造建築群の民族的デザイン感覚を浴びること。



ちょうど、修学旅行シーズンで、  
「わあ、すごい、チョーいい！」とかという、  
若々しい感受性の歓声を浴びるように聞くのも、  
日本的風景のひとつにもなっているのでしょうね（笑）。  
大いに若い人たちも感覚して欲しいなあと思いますね。  
京都が、そのような修学旅行のメッカになって、  
大多数の日本人が若い時期に訪れるように教育がされるようになってから、  
たぶん、明治以降100年以上経っているのでしょうね。  
このような民族的教育体験というものが、



日本人にどんな変化と、精神的痕跡を造形しているのか、一度調査してみる必要はあるかも知れませんね。

確実に言えることは、このような民族的木造デザイン感覚を共有していること。

たとえば、この写真でわたしは、緑の室内への取り込みについて屋根の大きな日本建築の内部の特徴である暗さと、床面の木に手入れをすることで黒く磨き上げられた鏡面が得られ、それに四季折々の外部風景、この時期であれば新緑が取り入れられていることが見て取れる。

こういう空間性、美的感覚に、心の襞の隅々が満たされていくような感覚を覚えざるを得ない。

こういう緑に対する「縁取り」は、緑を愛でるところにとって、演出装置としてすばらしい。

金閣を引き立てる池の水の映り込みのように、こういう美の反響装置を、どうも日本人は目的的に心がけてきた。

庭に面した木の床面を米糠等も使って磨き上げるということを日常生活習慣にしてきたという

そういった文化を持っている。  
家の手入れをする、ということの目的の中に  
こういった感性を楽しむという側面もきわめて重要な要素だったのだろうと  
そんなふうに思われます。

ただ、  
最近の日本住宅から、こういった感受性の部分が  
どんどん鈍磨してきていると感じるのも、  
これもまた、事実ではありますね。

## 慈照寺東求堂



京都出張での見学先のひとつであります。  
歴史民俗博物館の日本建築の特集企画では  
「日本の木造住宅の原型」とされています。  
室町時代後期、ということなのですが、  
なぜ、室町期というのは今日に至るさまざまな文化伝統が  
そこからスタートしているのか、本当に不思議だなあと思います。  
まあだいたい500～600年前ということになりますね。  
いわゆる「書院造り」や、茶室の初期形態とかが

この建物に集中的に実現されていて、  
四畳半という間取りも、ここから始まっているのだとか。  
創建者は足利義政ですが、  
この足利さんという氏族は、京都という街に大きな文化足跡を残した。  
氏族の中興の祖、というか、創業者といった方がふさわしいのか、  
足利尊氏という人物から始まって  
本当は下野の国の足利市が出身地でありながら、  
すっかり京都文化の精緻を体現したような人物を輩出する。  
さかのぼれば、八幡太郎義家に出自がある家系であって  
そうした武家貴族としての素養を意識していた家系ということなのか。  
それまでの貴族層の藤原氏の残した文化遺産と比較して  
自省的というか、内省的というか、  
現世利益的な部分よりも、精神性に重きを置いたような文化を感じる。  
鎌倉という武家権力の剥き出しのリアリズムを踏まえて  
王朝文化とは異なる独自性の高い文化を生み出した。  
そういったあたり、  
近世にまで連なってくる「個人主義」的な萌芽を  
感じさせるのかも知れないと思います。  
日本人はそこから、戦国に突入しての  
信長・秀吉・家康という3大スターのほうに目を奪われてしまうけれど、  
生活文化という側面からは、  
むしろこの足利将軍家の感受性の方をこそ、  
もっと研究した方がいいのではないかと思いますね。